議事録

司会：本日は、皆様方におかれましては、ご多用中にもかかわらずご出席いただき、まことにありがとうございます。私は、本日の司会進行を担当いたします日本森林技術協会のサトウと申します。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

会場の皆様方にお願い申し上げます。お持ちの携帯電話については、あらかじめ電源をお切りいただくか、マナーモードにしていただくよう、ご協力をお願いします。また、大地震、火災等が発生した場合には、当方より避難の指導を実施いたしますので、それまではお席から離れないようにお願いします。なお、当館は全面禁煙となっております。喫煙される方は喫煙所をご利用いただきますよう、ご協力をお願いします。

それでは、ただいまより、「屋久島世界遺産登録 20 周年記念シンポジウム in 東京　世界自然遺産・屋久島の未来」を開催します。開催に当たり、主催者である環境省九州地方環境事務所長代理、杉田統括自然保護企画官よりご挨拶をいただきたいと思います。

杉田：皆さん、こんにちは。本日は足元の悪い中、屋久島世界遺産登録 20 周年記念シンポジウムにご来場いただき、まことにありがとうございます。九州地方環境事務所長の塚本に代わりご挨拶させていただく統括自然保護企画官の杉田です。

皆様ご存じのとおり、屋久島は世界遺産に登録されて 20 周年を迎えました。屋久島の人気は今も高く、一度は行きたい世界遺産の上位にランクするほどです。8 月に公表された内閣府による国立公園に関する世論調査によると、ありがたいことに 90%近くの国民が国立公園を認知しています。一方、行ってみたい国立公園については、70%の方が世界自然遺産と回答しており、2 位の国立公園は 47%なので、世界自然遺産への国民の関心の高さがうかがわれます。

私は今からちょうど 10 年前に 2 年間ほど屋久島の勤務経験がありますが、世界自然遺産に登録されて 10 周年ということで、屋久島への訪問者が右肩上がりでどんどん増えた時期でもありました。当時は、登山者カウンターを設置した利用状況調査、荒川登山口等での交通整理、縄文杉周辺での利用状況調査、エコツーリズム推進のためのガイド制度の検討、外来タヌキの駆除、登山道整備、シカが増えた時期の小規模なネット柵の設置、口永良部島の国立公園化に向けた取り組み、永田浜のウミガメ観察ルール作り、ラムサール条約湿地登録に向けての説明会などを行ったことが思い出されます。利用者が縄文杉を傷つける事件が発生し、実況見分に立ち会えということで、私はモデルではありませんが、縄文杉の前で証明写真を撮られました。

いずれにせよ、遺産地域登録は地域に大きな影響を与え、観光産業の振興といった効果や山岳部の利用集中といった課題をもたらしています。環境省では、平成 8 年に

世界遺産センターを開設するなど遺産地域の情報提供を行うとともに、登山道の整備やヤクシカ対策としての植生保護など、遺産地域、国立公園の保護と利用促進に取り組んできました。また、遺産地域にかかわる林野庁、鹿児島県、屋久島町とともに、屋久島世界自然遺産地域連絡会議を組織し、協力して遺産地域の保全、管理に取り組んでいます。平成21年からは、本日は矢原委員長もおいでですが、屋久島世界遺産地域科学委員会を設置し、順応的管理のための科学的な助言をいただいています。

本日のシンポジウムは、屋久島が遺産地域に登録されてからの20年を振り返り、今後を考えるものです。基調報告では、官民学それぞれの立場で屋久島にかかわっている 3 名の演者に、屋久島についてご紹介いただきます。続くパネルディスカッションでは、屋久島町長の荒木耕治様にもご参加いただき、基調報告を踏まえて屋久島のこれからについて議論していただきます。出演者の皆様におかれましては、どうか忌憚のない活発な議論をしていただきたいと思います。また、ご来場の皆様におかれましては、このシンポジウムを通じて屋久島の現状、世界自然遺産の今後について理解を深めていただければ幸いです。

最後に、屋久島は最も新しい国立公園ですが、その前身から数えて来年の 3 月で国立公園に指定されて50年を迎え、国立公園である屋久島にとって大切な節目の年です。そういう意味でも、今回のシンポジウムの成果が地域と一体となった国立公園管理の一層の推進の一助となればと思います。

以上をもちまして、開会の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。（拍手）

司会：ただいまより会場の準備をしますので、皆様方におかれましては、少しの間お待ちいただきますようご協力をお願いします。

（会場準備）

司会：さて、基調報告に先立ち、本日は関係行政機関から多くの皆様にご臨席いただいております。時間の都合上、お一人ずつのご紹介は控えさせていただきますが、この場をお借りして御礼申し上げます。

それでは、基調報告に入ります。なお、会場の皆様からのご質問等は、報告が全て終了した後にお受けしたいと思います。初めに、環境省屋久島自然保護官事務所の加藤倫之自然保護官より、「屋久島世界遺産 20 年の歩み～遺産登録の効果と残された課題」と題しご報告します。では、よろしくお願いします。

加藤：皆さん、初めまして。ご紹介いただきました屋久島自然保護官事務所の加藤と申します。どうぞよろしくお願いします。

それでは、「屋久島世界遺産 20 年の歩み～遺産登録の効果と残された課題」ということで発表します。

まず、遺産登録の経緯について簡単にご紹介します。こちらの年表は、昭和 29 年、1954 年に特別天然記念物に指定されてから 1993 年、平成 5 年に遺産登録される前までのことが書いてあります。ここで 1 点、鹿児島県が屋久島環境文化村構想を練るために発足した屋久島環境文化懇談会において、初めて屋久島を世界自然遺産にしたらどうかということが言及されたことを皆さんに覚えておいていただきたいと思います。それを受けて、懇談会の委員、鹿児島県、旧上屋久町と旧屋久町が政府に働きかけて、日本が世界遺産条約を受諾したという経緯があります。こうした地域の動きがあって、日本国政府として遺産条約を受諾して、屋久島が遺産登録されています。

続いて、登録された遺産地域を紹介します。こちらの屋久島町の地図に口永良部島と屋久島がありますが、屋久島のピンク色の部分が世界自然遺産地域で、屋久島の面積の約 21%を占めています。

続いて、遺産登録された理由を紹介します。大きく 2 つあります。1 つ目は、顕著な普遍的価値が認められているからです。原生的な天然林や際立った標高差による自然美と、高山を含む暖温帯地域の特異な残存植生が海岸線から山頂部まで連続して分布する生態系が、顕著な普遍的価値として認められています。理由の 2 つ目が、認められた顕著な普遍的価値がここに挙げた 4 つの日本の国内法等によってしっかり保護されているからです。自然美と生態系を写真で示すとこんな感じですが、写真ではなかなか分からない部分があるので、ご興味のある方はぜひ屋久島にいらしてください。

遺産地域の管理体制について説明します。世界に認められた価値を有する屋久島は、このような体制で管理されています。まず、遺産地域にかかわる行政機関で構成される屋久島世界遺産地域連絡会議は、遺産地域の管理に関する方針の決定、管理計画の検討、関係行政機関の連携などを行う組織です。しかし、自然、生態系という不確実性の高いものを相手にしており、順応的管理の重要性を認識しているため、科学的知見に基づく助言を得るための仕組みとして、屋久島世界遺産地域科学委員会が平成 21 年、2009 年に発足しています。特に近年問題になっているヤクシカ対策については、科学委員会の中にヤクシカ・ワーキンググループが設置され、科学的な助言を得ながら対策を行っています。ただ、行政機関と科学者が協働すれば遺産地域が管理できるというわけではなく、民間も重要な役割を果たしています。屋久島では、屋久島山岳部利用対策協議会、屋久島町エコツーリズム推進協議会など、民間団体も入って屋久島の利用について議論する協議会があり、その事務局を行政機関が担うことにより、官民学の連携体制で遺産地域を管理する仕組みができています。

続いて、今日のテーマの一つでもある遺産登録が地域に与えた影響について見ていきたいと思います。まず、屋久島が有名になったという効果が挙げられます。ここに挙げたような旅行・登山雑誌が 1997 年から続々と創刊され、今でもこうした雑誌が毎年のように発行されています。さらに、登山用品店による屋久島の紹介も始まっていて、モンベルや好日山荘、石井スポーツなどの店頭には装備ガイド、登山情報のパン

フレットやリーフレットが置いてあります。さらに近年は、移住する方のための本も登場しているようです。1997 年に映画「もののけ姫」が公開されたことも大きいと考えられています。

有名になった屋久島に訪れる人の数も増えています。左側は入込客数のグラフで、若干減ったとは言われていますが、年間 30 万人程度が来島しています。右側は登山者数のグラフで、同じ方が 2 回入っているケースもありますが、年間約 27 万人、町の人口の約 20 倍の人が山に入っていることが分かります。

屋久島や山を訪れる人が増えることで、産業構造の変化も起こっています。これは各産業の就業者数を表したグラフですが、第 3 次産業が伸びています。注目していただきたいのは、主に観光客を相手にする小売業、飲食業、宿泊業に従事する人の数が 2000 年には第 1 次産業者、2005 年には第 2 次産業者の数を超えているということです。

そうした中で、数の増え方が顕著なのがガイド事業者です。現在、公益社団法人屋久島観光協会に所属しているガイドの人数は 162 人で、1995 年と比べると 8.5 倍に増加し、2000 年から相当増えているのが分かります。ただし、屋久島の場合は、観光協会に所属していなくてもガイドができるため、実際に何人のガイドがいるか分からず、200 人とも 300 人とも言われています。

屋久島では、観光業が成長したことにより第 3 次産業の生産額も増えています。2001 年を 1 として比べてみると、鹿児島市や鹿児島県の主要な離島は変わらないかちょっと下降気味ですが、屋久島だけは伸び続けているのが分かると思います。

観光産業が成長し、生産額も増えることによってか、屋久島では人口の減少が抑制されています。これは、今年発表された人口推計ですが、同じように鹿児島市や主な離島と比べてみると、屋久島は離島でありながら 2040 年になっても現状の 8 割以上の人口を維持すると予測されており、これはなかなか珍しいのではないかと思います。

次に、遺産地域においてどのような施策が取られてきたのかご紹介します。こちらに 1993 年に遺産登録されたときから 2013 年までに屋久島の山岳部で行われた施設整備を書いていますが、2012 年を除いて、ひっきりなしにトイレ、木道、デッキ、休憩所、避難小屋などの整備が続けられていることが分かります。

山の中だけではなく、里地にも拠点施設を整備しています。先ほど統括の話にもありましたが、環境省では 1996 年から屋久島世界遺産センターを開設しています。鹿児島県では屋久島環境文化村センター、屋久島環境文化研修センターという 2 つの拠点を整備しています。屋久島町では旧屋久町が平成元年から屋久杉自然館という博物館を整備し、1999 年にリニューアルしています。林野庁の拠点はありませんが、屋久杉自然館における著銘木落枝等の展示に協力し、屋久杉自然館の大きな魅力の一つとして貢献しています。

次に、利用に関するいろいろな仕組みも導入しています。例えば 2000 年からマイカ

ー規制を導入し、今では3月から11月までマイカーが規制されています。また、山岳部保全募金はある種の利用者負担の仕組みで、そのお金を使ってし尿を山岳部に残さず里地で適正処理をする取り組みを行っています。このように、ソフトの充実も図ってきました。

利用に関する取り組みだけでなく、保全対策も行われています。こちらに環境省の主な取り組みを示していますが、遺産登録される前から自然環境の調査等が行われており、登録後は自然環境の調査と利用実態の調査が継続して行われています。先ほどご紹介した科学委員会ができて、環境省だけではなく林野庁、鹿児島県、屋久島町の取り組みも盛り込んだ屋久島世界遺産地域モニタリング計画を策定しています。この計画に基づいて、何年には何をするということを決めて順応的管理の推進を行っています。

遺産地域においては、いろいろな効果が見られ、取り組みも行われていますが、残された課題として、山岳部の利用に関する問題とヤクシカによる問題の 2 つがあります。今回は、テーマの関係上、山岳部の利用に関する問題についてご紹介したいと思います。山岳部の利用には、利用者の増加による影響、利用者のリスクの増大、施設の維持管理費の不足という3つの問題があります。

1つ目の利用者の増加による影響については、生態系への影響、利用体験の質への影響の 2 つがあります。まず、生態系への影響として、シカが手を出すと近づいてくるなど、野生動物の人馴れがあります。分解されないごみが捨てられてしまって、結果的にこれが意図せぬ餌付けになるという影響もあります。また、人の利用による植生への影響もあります。2つ目の利用体験の質への影響として、まず利用拠点の混雑があります。大株歩道入口トイレは、特に女性は長いときだと1時間、2時間待つことがありますし、ウィルソン株や縄文デッキでは写真を撮るために渋滞ができるという状況です。そして、避難小屋に生ごみが放置される、登山道脇に排泄してしまうなど、利用環境の不衛生化もあります。あとは、多くの方が利用することによってトイレが壊れてしまうなど、利用施設の故障もあります。

2つ目の利用者のリスクの増大については、遭難件数の推移を見ていただきたいと思います。遺産登録されたのは1993年ですが、2000年以降、年間10件以上の遭難が発生しており、内訳を見てみると、半数以上が利用拠点である縄文杉登山や白谷雲水峡で起こっています。その大きな理由は疲労・持病・食中毒で、滑落や道迷いではありません。つまり、安易な気持ちで入山された方や、自分の体力に見合わないところに入山された方が遭難しています。残念ながら、今年もゴールデンウイークに 2 名の方が縄文杉登山中に持病・疲労で亡くなっています。

3つ目の施設の維持管理費の不足については、先ほど利用に関する仕組みの導入のところで屋久島山岳部保全募金を簡単にご紹介しましたが、これは、し尿搬出、トイレの維持管理等を目的として、登山口等で1人1口500円の募金をお願いしているもの

です。こちらの募金については、屋久島町山岳部保全基金条例に基づいて、屋久島町が募金の収支を管理しています。2008 年に始まりましたが、2010 年度以降し尿の搬出量が急増し、単年度赤字が継続している状態です。今は 2008 年から 2009 年に積み立てたお金を切り崩して何とかし尿の搬出を継続していますが、2014 年度にはそのお金も底をついてしまうかもしれないという緊迫した状態です。

では、そうした問題の原因は何かと考えてみると、逆説的ですが、1 つの理由として、環境保全のための施設整備で利便性が向上したことが考えられます。例えば植生の裸地化が進行しているので、それを保護するためにデッキを作ったら、明らかな休憩所になってしまったりしています。ほかにも、野外での排泄を減らすためにトイレを作っています。こういった施設整備以外に、保守点検の頻度をあげることも含めて利便性が向上する取り組みをしたことで、登山者ではなく観光客による山岳部の利用が増加したのではないかと考えられます。これは往復 10 時間の縄文杉登山をしている方の写真ですが、街中を歩いているような方やコンビニ帰りのような格好をしている方もいます。2004 年度の調査によると、縄文杉登山に訪れる方の 58%が普段は登山をしないという結果が出ています。それから登山者数はかなり増えているので、今では普段は登山をしない方の割合は 58%より多くなっていると考えられます。

このように問題の原因を考えると、山岳部の利用に関しては、まず観光客が増えて、利用の影響が強まり、事故の発生が増え、それを抑えるために施設を整備し、保守点検の頻度を増やし、利用しやすくなって、また観光客が増えるという循環に陥っているのではないかと考えられます。観光客が増えることは、地域にとっては産業が成長するのでいい効果だと考えられます。一方で、利用の影響が強まり、事故の発生が増えることは、利用体験の質が低下することにつながるのでよくない効果ですし、維持管理コストの増加を賄えない場合には、それもよくない効果なのではないかと考えられます。屋久島の山岳部の利用に関しては、このサイクル、バランスをどう整えるかが大きな課題と考えています。

そこで、屋久島で働いている自然保護官として感じる残された課題 4 点を皆さんにお聞き願いたいと思います。まず 1 点目は、どういった体験を通じて何を感じてもらいたいか決定することが必要なのではないかということです。例えば、比較的厳しい登山を通じて荘厳な自然美を体感してもらう、屋久島の山岳信仰を知り、自然に対する畏敬の念を感じながら人と自然の関係を考えてもらうなど、こういう体験でこういう感想、印象を持ってもらうということを屋久島で決定して、屋久島から発信していく必要があると考えています。

２点目は、利用体験の質を明確にすれば、それに応じた整備水準の設定ができるのではないかということです。誰もがアクセスできる場所はバリアフリー化を目指す一方、比較的厳しい登山を体験してもらう場所は装備や覚悟が必要な整備水準にとどめるなど、行き過ぎた整備は止め、重要なところはしっかり整備するという施設整備の

めりはりをしっかりつけていくことも大事だと考えています。

一方、ソフト面とハード面がそろった取り組みをしたとしても、観光客が訪れることは変わらないと思います。そこで３点目は、観光客を登山者にする仕組みを導入することも必要なのではないかということです。観光客が来るのはいいことで、来るなとは言えませんし、登山素人の観光客が登山の技術や山のことを知らないで入山するのが問題なので、登山の技術や山に対する考え方を学べる地域を目指していけばどうかと思います。例えばある程度きついところでは、事前のレクチャーの受講や一定の資格を有するガイドの同行を入山のルールにすることもあり得ると思います。

４点目は、受益者負担、利用者負担による遺産地域の保全管理です。今屋久島で主に行われているのはトイレの維持管理ですが、トイレだけではなく、山の中のパトロールや自然環境のモニタリング等にもコストがかかります。観光振興で得られた利益の一部を保全管理にかかるコストや環境保全に還元するという、本当の意味でのエコツーリズムの確立が求められているのではないかと思います。さらに、屋久島で今幾つかある募金制度の再編、募金方法の改善によって、入山者が協力しやすい募金にすることも必要だと思います。

遺産登録されたことによる効果と、残された課題について紹介しました。遺産登録されたことによって屋久島が注目され、第 3 次産業が成長しているのはすごくいいことですが、どう利用してもらうのかというバランスが今問われていると感じています。

ご清聴どうもありがとうございました。

司会：加藤自然保護官、ありがとうございました。
続きまして、屋久島在住で宮之浦集落岳参り復活の中心人物である宮之浦岳参り伝承会の中川正二郎様より、「屋久島・岳参りの復活」と題してご報告いただきます。それでは中川様、どうぞよろしくお願いします。（拍手）

中川：屋久島より参りました、宮之浦岳参り伝承会の中川と申します。今日はどうぞよろしくお願いします。

私の本業は、再来年で 50 年を迎えるスポーツ用品店の 2 代目です。店の半分以上はアウトドアショップという状態で、毎日のように登山客と接しています。それから、地元の消防団の山岳捜索隊という組織にも 20 年以上所属しており、これまで多くの遭難事例に携わってきました。そういう関係もあって、今日は岳参りのお話をすることになりました。本来は、私よりもはるかに厳かに、しかも長く伝統を続けている地区の方がたくさんいるので、はなはだ僭越ではありますが、今日は屋久島の心である岳参りを少しでも皆さんに知っていただきたいと思って頑張ってお話しします。てんこ盛りなので、しっかりついてきてください。

屋久島は、ご存じのとおり山、海、川などすばらしい大自然が身の回りにいっぱい

あります。島の人は、自然のあらゆるところに神様がいると思って生活しています。例えば身近なところでは、沢を渡るときは咳払いをして、もしくは柏手を打って水神様に知らせてから渡ります。それから、子供たちは、川で立小便をしたり木に引っかけたりするときは「ごめん、ごめん」と言わないと、罰をかぶってちんちんが腫れるよと怒られます。

それから、これは屋久杉、縄文杉ですが、昔は岳杉と言っていました。今でもご神木、神が宿る木として大変あがめられています。山でこういう大きな木の根元、もしくは岩屋に泊まるときは、寝床に榊か塩をまいてお祓いして神に許しを得てから泊まらないと、大変なことが起きると言われています。私も実際に山に入るときは、必ず自分と周囲を塩で清めて、山神に安全をお祈りしてから入っています。

これはヤクシマシャクナゲです。大変美しい花で、山の精霊が宿ると言われています。屋久島町の町花でもあります。そして、これが今日の主役でもあって、岳参りの象徴と言える花です。なぜ象徴と言えるかは、最後のほうで分かると思います。

では、岳参りの説明をします。岳参りとは山岳信仰の一つです。山岳信仰は日本中にありますが、屋久島の場合は約 500 年前から伝わる集落行事であるというところが特徴です。集落ごとにあがめる山があって、その頂には石の祠が祀られており、年に一度ないし二度代表者が登って集落の繁栄や安全を祈願します。

屋久島は大小合わせて 24 の集落があり、集落の目の前にある前岳という山の上に各集落の祠を祀ってあります。そして、各集落がそこにお参りしますが、奥岳にも祠があります。宮之浦岳、永田岳、栗生岳の 3 つが三岳という山で、皆さん大好きな焼酎三岳は、実はこの山のことです。この山には宮之浦、永田、栗生地区が登ります。昔はみんなが奥岳を目指しましたが、現在は自分たちの山にだけ登ります。現在は、24 集落のうち 21 集落で岳参りが復活を果たしたので、ほとんどの集落で執り行っています。

では、具体的にどういうことをするのかご紹介しますが、地区ごとに大きく変わるので、今回は私たちの地区のものをご紹介します。宮之浦では、戦時中を最後に 60 年ほど途絶えていましたが、9 年前に私たち有志で復活に取り組みました。春と秋、旧暦の 5 月と 9 月に宮之浦岳に登ります。ほかの山へは参りません。当日の朝 4 時半には益救神社へ参ります。昔は益救島といい、救いの島とも言われていました。お参りを済ませたら、すぐに向かいの一本ケ浜へ行ってみそぎをし、榊でお祓いをします。そして、ここが大事ですが、山の神へ届ける浜砂を取ります。まだ誰も足を踏み入れていない一番砂という波打ち際の砂を竹の筒に入れて持っていきます。

永田集落は、先ほどの砂を取ったところから山頂を目指して大変な距離を歩きますが、私たちは日帰りなので、車で移動して淀川登山口から入ります。片道 8 キロ、約 4 時間の道のりを歩いていきます。すぐに淀川小屋に着きますが、この小屋のすぐ手前からが世界遺産です。ここは大変規制の厳しいところで、石ころ一つ、葉っぱ一つ持

ち帰ってはいけないと言われています。私が聞いたところでは、石を右から左にちょっと動かすのもだめだそうです。そういうエリアに私たちの祠があります。ここが中間地点の花之江河です。ここに宮之浦集落の祠がありますが、帰りにお参りします。

これが宮之浦岳ですが、まだまだはるか先です。天気のいい日は、森林限界を超えるととてもさわやかで気持ちがいい登山ですが、ひとたび天気が崩れると前が見えません。これはガスがかかっているだけですが、これに雨が加わると大変なことになって、一気に遭難の危険が高まり、恐ろしい山へと変貌します。これはシャクナゲが満開の季節の写真です。こういうときは天国のように美しいです。ですから、恐ろしく、また美しい二面性のある山です。奥岳連峰をトラバースして山頂へ着きます。約 4 時間の道のりです。天気のいい日は鹿児島本土が見え、ここが開聞岳、ここが大隅半島、ここが桜島です。ただ、このように見えたのは 17 回行ってたった 1 回です。あとは全く見えませんでした。それから、手前にたくさんの山があるので、ふもとの集落から山頂は全く見ることができません。

宮之浦の祠は、山頂にはなくて山頂から少し下りた岩の間に納めてあり、仏教の最高位である一品法寿大権現と、もともとあがめていた神道の山幸彦の 2 つをあがめています。要は、神仏混交、宗教を超えた存在としてあがめられています。現在の祠は、宮之浦の人たちが 82 年前に担ぎ上げたものです。実物を見ると大変な重さで、よくこんなものを上げたものだと思います。後ろのほうには、400 年ほど前の祠も崩れてはいますが残っています。昔から担ぎ上げてきたということです。

着いたらすぐに準備をします。塩、米、焼酎、お賽銭を祠の前に供え、竹筒に入っている砂をまきます。そして、お参りします。お参りは、豊漁豊作、無病息災、家内安全、商売繁盛を祈願しますが、2 人の所願という代表がいて、一人がまずこれまでの願を解き、もう一人がこれから先の願をかけます。これを毎回繰り返します。なので、必ず 2 人は行かないといけません。1 人ではだめです。

お参りが終わったら、ご飯を食べてすぐ下山します。下山の途中に栗生岳の祠が岩の間にあり、無視するわけにも行きませんから、よその集落のものですが一応私たちもお参りします。狭いのでこういう状態です。

ここで、お土産を持って帰るという忘れてはいけない大切な用事があります。春はシャクナゲの花のつぼみ、秋はシャクナゲやアセビの枝を取って持ち帰ります。一生懸命取ってくれているのは、先ほど発表した加藤君です。最近は、彼が一生懸命やってくれるおかげでたくさん取れるようになりました。ありがとうございます。ここは国立公園であり、世界遺産エリアですから、本来法的には許されない行為ですが、私たちは誰が何と言おうと、先人たちが伝えてきた古来よりの慣わしに従うと思って続けています。決していたずらにきれいだからといって取っているわけではありません。これは、神様からの贈り物、ご褒美でもありますし、先ほども言いましたが、シャクナゲには精霊が宿ると言われているので、神々の力をいただくという意味合いがあり

ます。お土産を担いで下りていくと、先ほど言った花之江河をまた通るので、170 年前に宮之浦の青年たちが担ぎ上げた祠をお参りします。登山口に着くまで 10 時間かかり、秋には真っ暗になっています。

すぐに下山して、神社へ花を届けます。そして、待ってくれている関係者の皆さんに花を分けます。この花は大変ありがたい神様からのプレゼントですから、尊いものとして床の間に飾られます。そして、もう一つの慣わしとしてまち迎えといって、宮之浦の場合は下りてきたところでぼたもちをいただきます。本来は山との境界、神の世界から出てきたところでいただきます。これは、神の世界に行って取り付いた魑魅魍魎、いろいろな神様を落とし、俗世間へ帰ってくるという意味合いがあります。地区によって食べるものが違います。そして、夜に改めて慰労会をしてもらいます。今は婦人会の方がやってくれます。

以上が岳参りで具体的にしていることです。では、なぜ私たちが岳参りを復活させ、見直しているかというと、世界遺産登録後山のありさまが大きく変化したことが一因だといえます。屋久島は今有史以来最大の注目を浴びています。そして、観光客・登山客が急増し、かつてない好景気になって、大変ありがたいことです。そして、形は違いますが再び屋久島の山が宝の山になりました。同時に、多くの人が山へ入るようになり、登山道の荒廃、し尿の問題などいろいろなことが起きて、私が一番心配しているのが事故・遭難の多発です。そういういいことも悪いことも起きました。山とのかかわりが急激に濃厚になり、心配なこともありがたいこともあり、いろいろな思いがわき起こってきて、再び山の神様のことが気になり、みんなで話し合ったわけでもありませんが、やめていた各地区でもいつの間にか自然発生的に岳参りが復活しました。それが全体的な復活の流れです。

屋久島は以前から遭難、道迷い、行方不明が多い恐ろしい山だったわけですが、世界遺産に登録された 3〜4 年後から毎年のように遭難が相次ぎました。私がかかわったのは　　北部及び中央部の行方不明事例なので、けが、病気や南部地方の捜索は入っていませんが、20 年間で捜索が 17 件あり、そのうち奥岳方面、宮之浦岳方面が 9 件、近くの山が 8 件で、奥岳では 8 人が亡くなりました。私が知っている限り、奇跡的に 7 日間かけて自力で下山したのが 1 例だけありますが、奥岳で行方不明になったら探し出せないのでまず助かりません。それから、前岳は全員無事とは書いてありますが、あの狭い白谷雲水峡の中でさえ探し出すのに 3 日かかったことが何度もあります。大変奥深くて怖いところです。しかも、8 人のうち 4 人はいまだに見つかっていません。見つかった 4 人も、捜索のときは見つからず、1 年後、2 年後にほかの人の捜索をしているときに見つけるというパターンです。私も何人か見つけました。

捜索にかかわっている中で、私ももっと山を知っておかないといけないと思って、永田地区の浜から歩く大変厳しい岳参りや吉田地区の岳参りについていきましたが、その人たちの山に対する敬虔な姿を見て驚き、すごいと思いました。そこで、私たち

も含めて一般の人が本来聖域である山にあまりにも気軽に入り過ぎて、山へのおそれや敬いの心、畏敬の念が欠如していることが、いろいろな問題を引き起こしているのではないかと気がついたわけです。それが、私が岳参りを復活させるきっかけになりました。浜砂を山の神へ届け、精霊が宿る花や木を持ち帰るのは、命の循環や山と人のつながりを表しています。そのどちらが欠けても成立しないという意味で、砂とシャクナゲは岳参りの象徴です。

最後に、畏敬、感謝の気持ちが自然に対する心構えだと思います。これを失って山に登ると大変なことになります。人はついこういう気持ちを忘れてしまうので、岳参りはそれを忘れないための慣わしであると私は考えています。ですから、あれだけきついことをみんなやるわけです。私たちは 9 年前に 4 人で復活に取り組み、若者たちも徐々に賛同し数が増えてきて、今年の春は総勢 14 名で行くことになりました。この中には、環境省の職員も 3 名入っております。彼らが 50 年後 70 歳のおじいさん、おばあさんになったときにたとえ岳参が途絶えていたとしても、きっとこの心を後世に伝えてくれると信じています。

今はロケットが宇宙を飛び交う時代です。平成の今に山の神を敬う屋久島の心を未来へ、そして世界へ広め、屋久島だけではなく皆さんの身の回り全てにおいて自然を大切にすることを願っています。

最後に一言お話をさせてください。今日このように環境省のイベントで岳参りのお話をすることになろうとは、ちょっと前までは夢にも思いませんでした。というのも、私たちは花を取る側、環境省はそれを守る側で、ある意味敵対関係というか、お互い距離を置いて知らないふりをしていたわけです。ところが、5 年前にオクダ担当官が岳参りに理解を示し、次の担当官の加藤君も含め、一緒に行かないと分からないといって一緒に行ってくれました。そのうちに、どんどん理解が広まってきて、今日のような日を迎えることになったわけです。岳参りをこの場で発表できた今日は、屋久島にとって大変画期的な意義のある日です。機会を与えてくださった環境省の皆さんに、心よりお礼を申し上げます。

以上です。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会：中川様、貴重なご報告をありがとうございました。最後に、国立歴史民俗博物館の柴崎茂光准教授より、「世界遺産登録後の屋久島の利用動向」と題しご報告いただきます。柴崎准教授、よろしくお願いします。

柴崎：皆さん、こんにちは。国立歴史民俗博物館で教員をしております柴崎です。
本日は、「世界遺産登録後の屋久島の利用動向」というテーマで発表します。本報告の流れは、観光客の動向を話すだけではなく、世界遺産である屋久島のどう生かしていくかというブランディングのあり方、さらに、環境だけではなく、地域づくり全般の

あり方についても簡単に話をしようと思います。

最初に、観光客の動向を把握するために、2011 年から 2012 年の夏にかけて、屋久島の入込地点である屋久島空港・宮之浦港・安房港で対面式のアンケート調査を実施しました。2012 年の夏は台風が来たため、2013 年に補足調査をしましたが、私の能力不足でそこまでデータを入れることができなかったので、今回は 2011 年、2012 年の結果を発表します。アンケートの方法は、搭乗予定者に対して 5 名から 6 名に 1 人の割合で被験者を抽出して、より実態に近いアンケート調査とするよう努力しました。その結果、2,503 名に対してアンケートを配布し、2,247 名、9 割ぐらいのお客さんから回答をいただきました。

この図は、屋久島への入込数の経年変化を表したものです。10 万人前後で推移していましたが、1980 年代の終わりぐらいから急増します。その一番大きい原因は、高速船の就航です。世界遺産の登録がそれに拍車をかけることとなり、入込数がどんどん増え続けて 2008～2009 年あたりには 40 万人に達し、その後落ちついて現在は 30～35 万人前後を行き来しているという状況です。ただし、入込数の全てが観光客ではなく、地元の方の利用なども含まれた数字です。観光客はどれくらいという詳しい統計がないので、自分たちの研究グループが定期的に調べたところ、今から 15 年前、1997 年ぐらいには 12～15 万人、2001～2002 年については 20 万人弱が観光客であろうと分かってきました。今回のアンケート調査は、このところを明らかにするものですが、調査の結果、現段階ではどの時期についても入込数の 7～8 割、25～28 人が観光客ではないかと大まかに推計しました。

お客さんがどういう特徴を持っているか 15 年間の観光トレンドを調べてみると、まず大きな特徴として、1997 年の夏の時期は女性のお客さんは 37%しかいませんでしたが、現在は男女比が 1 対 1 になっています。とりわけ近年は、いわゆる山ガールファッションで来る若い女性が目立ちます。年齢については、閑散期（秋・冬）は 50～60 代の中高年、繁忙期には 20～30 代の若者が非常に多いことが分かっています。観光客の居住地は、関東と近畿で半数を占めている一方で、九州・沖縄地方、鹿児島県内からの観光客の割合が減少しています。夏の時期に特化して言うと、15 年前は観光客のうち 22%が九州・沖縄から来ていましたが、今は 1 割程度に減少しています。それから、グループの人数は、10 年前は比較的団体客が多かったのが、最近は 1～2 名の個人客が中心になっていることが分かりました。まとめると、現在の屋久島の観光は、首都圏や大阪などの大都市圏からやってくる女性の個人客が 2～3 泊するのが主流だと言えます。

そうしたお客さんがどういうところを回っているかというと、これは宮之浦浜、ヤクスギランド、白谷雲水峡、いなか浜、ガジュマル園という主要観光地の訪問割合を表しています。まず、オレンジ色に注目すると、白谷雲水峡、いなか浜は年代がたつごとに訪問する観光客の割合が順調に伸びている一方で、10 年ぐらい前まで団体客の

訪問先の中心であったヤクスギランド、ガジュマル園は割合が小さくなっているのが分かります。したがって、縄文杉、白谷雲水峡、いなか浜といった特定の観光地に利用が集中しているのが分かります。

とりわけ利用の集中が続いている縄文杉には、ゴールデンウイークや夏期といった繁忙期には 6 割、かつては閑散期だった秋にも半数の観光客が訪問しています。縄文杉を訪問するためには、少なくとも 9 時間から 10 時間歩かなければいけませんが、そういった奥地に近い場所に入っているのが非常に特徴的な現象だと考えられます。縄文杉を訪れる人たちに混雑についてどう感じるか質問したところ、「とても混雑」、「やや混雑」と混雑を感じている人の割合が秋、冬の時期は少ないですが、繁忙期には 7 割を超えることが分かりました。これは 2010 年のゴールデンウイークに縄文杉に向かうルートを撮影した写真ですが、この日は 900 名ぐらいが登り、ウィルソン株を過ぎて縄文杉に近づくにつれて渋滞が頻繁に見られました。

こういう状態が発生した理由として、私は 2 点指摘したいと思います。1 つは、2000 年に初めてシャトルバス制度を導入し、このときはゴールデンウイークのみだったのが、2007 年からは夏の時期、2010 年からは 3 月から 11 月の 9 カ月間となりましたが、総量規制がかけられていないので、これまでレンタカーを借りられず行けなかった人が行けるようになって総数が増えて、入下山口が荒川登山口に集中するという状況が起きています。

もう一つは、エコツアーの存在です。エコツアーは皆さんご存じだと思いますが、国立公園などの保護地域でガイドが少人数の観光客を案内しながら、自然、文化などを紹介する観光の一形態と言われています。エコツアーの利用率は、一番顕著な夏の時期には今から 15 年前は 10%に過ぎなかったのが現在は 45%に達していますし、ほかの時期にも順調に伸びていて、年間平均で 35%程度であることが分かりました。エコツアーを利用するお客さんが訪問するところは、縄文杉、白谷雲水峡といったお客さんが伸びているところと合致しているので、これらには何か関係があると言えると思います。

さらに指摘したいのが、理論上のエコツアーは、マスツーリズムに対抗する概念として提唱されたもう一つの観光の流れをくむとされています。しかし、このアンケート調査はエコツアーを利用した人の何割がパッケージツアーに参加したかというエコツアーとパッケージツアーの関係性を表したものですが、結果を見ると、エコツアーを利用した利用した人のほうがパッケージツアーに参加した割合が高く、屋久島のエコツアーはパッケージツアーのオプショナルツアーとして実施されている傾向が年々強まっていることが分かりました。10 年前と比較しても、エコツアーとパッケージツアーの関係はより密になっています。

以上のことをまとめると、このようなことが言えると思います。1 点目は、遠方の大都市からの女性を中心とした観光客が増えています。また、周遊型の団体客から屋久

島滞在・個人客を中心とした観光にシフトしています。とりわけエコツアー客が増加していて、パッケージツアーとの関係が緊密になっています。それから、観光客が特定の観光地に集中し、それがエコツアーで訪問する場所と合致している一方で、かつての団体客の主要な来訪場所への訪問者数は減少していることが分かりました。また、入込数が 2010 年以降若干減り始めていることや、1 人当たりの土産物購入代が減少していることもあって、里の価値が下がっているのが気になります。
以上でアンケートの分析を終わります。

続きまして、屋久島のブランド化のあり方について話をしたいと思います。この写真は、今から 60 年前に『旅』という旅行雑誌で取り上げられた屋久島の記事です。当時の特集を見ると、この時代は、縄文杉は発見されていないものの、屋久杉は天然記念物に指定されていたわけですが、安房川のつり橋の下で丸木船に乗った少年や、盆踊りを踊っている風景など、里の暮らしに非常に関心が集まっていることが分かりました。縄文杉が発見された後も、しばらくは里の暮らしを紹介する記事がかなり多いです。屋久杉、縄文杉のブランド化は世界遺産登録後に旅行業界、メディアによって後押しされた部分が大きいと認識しておいたほうがいいのではないかと私は考えます。

里の暮らしに注目するのが重要だと私は思っていますが、そういう例は全国にあるわけです。例えば岩手県遠野市にあるふるさと村では、南部曲り家を移築して村の空気を再現しています。それだけではなく、日中は周辺の住民が「まぶりっと」という名前で実際に畑を耕したり料理を作ったりしていますし、民具も自由に触れます。こういうところを観光客が訪れると、地元の人との何気ない会話が自然に始まっていくわけです。かつて屋久島でも旧屋久町で郷土資料館が立ち上がりましたが、残念ながら実現化はしていません。近年里とエコツーリズムの議論が盛んになっており、やり方を間違えると生活空間と観光空間を混同してしまって衝突する可能性もありますが、もしこういう郷土館等を屋久島に作ることができれば、そうした問題も少しは低減できるのではないかと考えています。

それから、本当に里の魅力はないのかというと、例えば IUCN が屋久島を世界遺産に推薦した後に書いたレポートの中で、現在世界遺産地域に指定されていないけれども、指定されるべき杉、建物があるという指摘がされています。千尋の滝もその一つだと思いますが、こういうところをきちんと登録して、見せる工夫をすれば、滞在するマスツーリストが増える可能性があるのではないかと考えています。例えば三大名瀑の一つと言われている茨城県の袋田の滝は落差 120 メートルぐらいの非常に大きな滝ですが、2006 年から 2008 年ごろ集中投資をして地下道、エレベーター、展望台をリニューアルして、バリアフリー型の観瀑台が用意されています。その結果、リニューアルオープン直後には入込数が前年の 3 割アップし、190 万人を超えたと報告されています。千尋の滝が世界遺産に追加登録され、さらに公的機関が観光投資をすれば、マスツーリストもやってくるのではないでしょうか。かつて千尋の滝は下まで行けて、

今は施設が老朽化して立ち入り禁止になっていますが、里のある部分については公的機関が投資する価値があるのではないかと考えています。

それから、そもそも世界遺産ブランドは観光にしか利用できないのかという疑問が私にはあります。1 次産品や加工品も、十分世界遺産ブランドとして使えるのではないでしょうか。都市住民は屋久島への憧れを持っていますし、都内のアンテナショップのご主人からは、屋久島産の 1 次産品や加工品は売り先を確保すれば売れるのではないかという意見をもらいました。観光客が屋久島に宿泊して、お土産として果物や農産品を産直所で買う人ももちろんいますが、むしろ都市と販売先のネットワークを構築し、積極的に都市に売り込んだほうがいいと思います。

例えば板橋区の大山商店街には「とれたて村」というアンテナショップがありますが、ここでは生産者側の情報提供、交流の対価として月額数万円の会費を払えば、商品は全品振興組合が買い取ってくれるというリスクを下げる仕組みもあります。こういうアンテナショップと交流することによって、屋久島産だと喜んで買う人が出てくるのではないかと思います。それから、隣には山形県産の商品に特化した民間の販売所も存在します。ここのご主人に伺うと、屋久島の商品を買う人は絶対にいるとおっしゃっていました。

もう一つ、屋久島の教育施設を充実させて、世界遺産ブランドと合わせていけばいいのではないかと私は思います。屋久島には、図書室はありますが本格的な図書館はありません。福島県矢祭町がやっている「もったいない図書館」のように、全国の人々から図書を寄贈してもらって図書館を作ったら、地元の人はもちろんですが、雨の日には観光客もやってきてくれるのではないかと思います。矢祭町の場合には、歴史民俗資料館を併設しています。運営の仕組みを簡単に紹介すると、全国から寄贈された「もったいない図書館」書籍をボランティアの運営員が管理します。さらに、幾つも同じものが来た場合は、捨てるのではなくて町内 25 カ所にある「もったいない文庫」に分け、月に 1 回読書の日を設けて、開架して集落の人たちに見てもらっています。さらに、無償でキャラバンカーを譲り受けたり、運営員は司書として指導したり学校支援をしたりしています。屋久島でも、屋久杉自然館がありますが、加えて公立の図書館に林業や環境に関する映像を集めると、さらに付加価値を高めることができるのではないかと思います。

もう一つ、屋久島の自然遺産が注目される一方で、文化的遺産が失われる可能性が生じているということを指摘したいと思います。これはかつての森林軌道、集落跡、貯木場跡を表していて、有名な小杉谷、石塚以外にあちこちに軌道、集落跡がありますが、一般的にはあまり知られていません。例えば宮之浦川右岸の国有林内、現在の屋久島総合自然公園の少し上流に当たる場所には、昭和 40 年ぐらいまで地元では官行と言われる集落が存在していました。昭和 34 年当時は 200 人ぐらいの人が生活していて、集落の中には宮之浦小学校岳分校がありました。左側の写真は山の神祭りで皆さ

んが楽しんでいる様子、右側の写真は昭和初期の斫伐所の事業所跡です。

ちなみに現在も、実際に入ってみるとさまざまな遺構があります。こうしたところで暮らしていた方はまだまだ生きていらっしゃいます。観光につなげるかどうかは先の話ですが、遺構だけではなく当時の生活の記憶をうまくつなげて、文化的遺産を記録していくことは重要ではないかと考えています。安房森林軌道は近代化産業遺産に登録されていますが、それ以外の軌道は保護地域の指定外で、現在消失の危機にあります。間伐事業の一環として、宮之浦小学校岳分校跡の池の遺構は壊されてしまいました。こういったことがあちこちで起こっているので、守っていかなければいけないと思います。

最後に、地域づくりのあり方について提言したいと思います。これまで行政は、屋久島の山岳地域を中心として荒川登山バス、山岳部保全募金などさまざまな施策を行ってきました。しかし、まだまだ根本的な課題は残ったままだと考えます。その理由は、問題が起きてから解決するという対処療法的な対応が非常に多いからではないかと思います。島民、とりわけ観光業に従事していない若者も交えて、縄文杉、登山歩道はどういう空間であるべきか、里の川はどういう場所であるべきか議論することによって大方針を作った上で、具体的にどういう対応策を取るか議論していかないと、加藤さんもおっしゃっていましたが、同じような問題が繰り返されるのではないでしょうか。

それから、研究者と行政の関係ですが、従来型の権威づけするための委員会はやめたほうがいいと私は思います。例えば私がこれまで委員としてかかわっている屋久島世界遺産地域科学委員会では、世界遺産地域の拡大、管理方針の見直しを提案してきましたが、諮問機関ではなく助言機関ということもあって、なかなか話が進んでいません。結果的に、管理計画を改定するためだけに設置された委員会になってしまっているのは非常に残念だと思います。これはやめて、真の意味での協働、すなわち計画段階からわれわれの意見のいいところをぜひもっと酌み取ってもらえるとありがたいと思います。

そして、議論する場は屋久島になかったわけではありません。かつて屋久島には岳南高等小学校という旧帝大出身者を輩出した教育の中心機関がありました。当時の文書を読むと、「岳南健児は創立当時より御互、郷土開発について各々意見を持ち、機会ある毎に、討論会が盛んであった」という記述が残っています。かつて旧上屋久町が隣地活用計画を地元の人たちの意見も交えて策定しましたが、もう一度そういうものを策定する時期に来ているのではないかと思います。「と金の遅早」ではありませんが、時間はかかるけれどもじっくり意見をまとめていくしか最善の道はないのではないかというのが私の考えです。

以上で終わります。ありがとうございました。（拍手）

司会：柴崎准教授、ありがとうございました。

司会：会場の方から、基調報告をいただいた 3 名の方々に何かご質問などはありますか。では、そちらの赤いお洋服の方、お願いします。申し訳ありませんが、ご所属とお名前をお願いします。

質問者：日本勤労者山岳連盟のハヤシと申します。大変おもしろい話をありがとうございます。われわれもシカ対策に大変苦慮しています。加藤先生にお聞きしたいのですが、シカは増えているのでしょうか。それから、具体的な対策のエピソードがあれば教えてください。

加藤：シカについては、個体数が増えているだけではなく、分布域が拡大していることによって、昔はいなかったところで絶滅危惧種であるシダやランといった植物が食害される、農業被害が出ているという問題があります。エピソードというか、環境省では平成 12 年度からシカ、タヌキの調査をしていくなかで、遺産登録された後になりますが、シカについて生態系に影響が出てきているのではないかということが分かり始めて、ようやく平成 21 年度からヤクシカ対策を進めているところです。平成 23 年度には鹿児島県も特定鳥獣保護管理計画を策定し、国、県が協力しながらシカ対策を今まさにやろうとしているところです。

質問者：ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。ほかにご質問のある方はいらっしゃいますか。

質問者：屋久島ファンクラブのタケダといいます。今シカ対策の話がありましたが、屋久島はシカが減少しているので保護しなければいけないという話が以前あったと思います。今は逆にシカが増え過ぎているというか、町でよく見かけるようになって、永田地区ではシカの対策が追いつかないから柵を張って、人間の動物園なのかシカの動物園なのか分からないような感じに見受けられます。シカ対策の中で、協会と連携した対策が幾つかありましたが、猟友会がなく、現場の人や地元住民の声が反映されていないと感じたので、質問します。

加藤：ありがとうございます。今日発表したのは山岳部の利用に対する問題で、シカ対策に関しては、もちろん地元猟友会である上屋久猟友会と屋久町猟友会と密接に連携、協力しています。さらに、山岳部においては急峻な地形もあるので、高齢化している猟友会の方々だけではなく、ほかに技術や専門知識を有する捕獲者にお願いでき

ないかという点についても検討しており、民間の方、研究者の方とも協力し合って対策に取り組んでいます。

質問者：ありがとうございました。PM2.5 などの大気汚染で山のエサがなくなってきたり、高齢化が進んで狩りで捕られるシカが減ったりして、シカがどんどん里に下りてきて人間に馴れているのではないかと私は思います。

もう一つの質問は、山岳体験を通して山でのマナーを伝えられたらいいと言われましたが、エコツーリズム、パッケージツアー、ガイドさんを使う仕組みでは、ガイドさんが説明、教育をしているのではないかと思います。一番問題になっているのは、個人で来た学生が都会と同じ感覚で普段着で山に入ってけがしてしまうということなので、宿泊施設の人が学生にも教育できたらいいのではないかと感じました。そのことで意見をいただければと思います。

加藤：どう答えたらいいか難しいですが、今日中川さんからの話にもあったように、島の人たちが山のことをどう見ているのかというと、僕も地元の集落で暮らしていますが、山は怖い場所なので人が行くところではない、川をカヌーで漕ぐものではないという意見が多いです。島の人たちと島外からくる方々の交流の場を持って、そういう地域の人たちの意見も聞きながら、それでも山に行くという両面を把握する経験を里でしてもらうのが大事だと思います。

質問者：長くなりましたが、ありがとうございました。

司会：まだまだご質問が出てくるかと思いますが、お時間の関係上ここまでとさせていただきます。質疑応答はパネルディスカッション終了後にもありますので、質問できなかった方はぜひそちらでお願いします。

以上で基調報告を終了します。ただいまより 10 分間の休憩とします。次のパネルディスカッションは、休憩を挟んで 15 時 5 分から開会します。会場の皆様におかれましては、15 時 5 分までにご着席いただくようお願いします。

（休憩）

司会：それでは、お時間となりましたので、これよりパネルディスカッション「島外からみた世界遺産の島“屋久島”への期待」に移ります。パネルディスカッションは、東京農工大学大学院教授の土屋俊幸様にコーディネーターをお願いしております。また、パネリストは、離島経済新聞社代表の鯨本あつこ様、公益財団法人日本交通公社理事の寺崎竜雄様、山と渓谷社 Yamakei Online 部の神谷有二様、屋久島町長の荒木耕治様、また、基調報告から引き続きご参加いただく宮之浦岳参り伝承会の中川正二郎様、国

立歴史民俗博物館准教授の柴崎茂光様の 6 名の方々にお願いしております。

まず、壇上の皆様に自己紹介と、「島外からみた世界遺産の島“屋久島”への期待」という観点から 5 分程度でお話をいただいた後、パネルディスカッションを始めたいと思います。ここからの進行に関しては、コーディネーターの土屋先生にお願いしたいと思います。それでは、土屋先生、お願いします。

土屋：皆さん、こんにちは。今ご紹介いただいた東京農工大学の土屋と申します。これから一応予定では質疑応答も含めて 16 時 25 分までということで、今日来られている方を見ると、とてもではないですがこの時間で終わるとは思えませんが、短い時間になるべく中身のある討論をしたいと思います。

今ご依頼があったように、これから順番に自己紹介をしたいと思いますが、もうご報告されているお二人は少し短めにお願いします。初めに私からということで、東京農工大学の土屋と申します。専門は林政学ですが、何のことか分からないと思うのでブレークダウンすると、住民参加によって自然資源、森林資源をどう管理するかという森林資源管理論、観光レクリエーション論、今回のような国立公園、遺産地域をどう管理するかという保護地域管理論を中心に研究をしています。屋久島は、年がばれますが私が大学 4 年生だった 1977 年に卒業旅行で伺って、縦走して帰ってきたというのが初めてです。それから 4～5 回屋久島にはお邪魔していますが、今日のテーマになると思われる縄文杉には初回以降行っていません。というのは、私が初めて行ったときは非常に荘厳な経験をしましたが、次に行こうと思ったころにはデッキ化の話が出ていたからです。研究者としてはまずいですが、行っていないと言っておかないと、後でおまえはあんなことを言ったなんていうことになりますので、初めに言わせていただきたいと思います。

あまり時間がないので、屋久島への期待は、保護地域管理論から言うと、屋久島は日本国内だけでなくアジアや世界的に見てもかなり管理が進んでいるところです。ですから、これから克服しなければいけない問題がいろいろ出てくると思いますが、フロントランナーとしての屋久島をこれからもぜひ続けていっていただきたい。今日はそのための一歩ではないかと思います。以上です。

では、鯨本さん、お願いします。

鯨本：初めまして。離島経済新聞をつくっている鯨本あつこと申します。よろしくお願いします。

まず、自己紹介ということで、私は、離島経済新聞という媒体は聞いたことのない方が多いと思いますが、日本全国の有人離島の情報をタブロイド紙などにまとめたり、ウェブサイトをつくったりしています。「経済新聞」と付いていますが、本当に小さなベンチャーの会社です。私が離島経済新聞という立場から島を語りますと、まず説明

すべきところが、そもそも日本は島国で、日本の中には 6,852 個の島があります。その中で、有人離島が約 420 あり、屋久島は佐渡島、奄美大島、対馬の次に 4 番目に大きい島です。私はいろいろな島に携わっていますが、もともとは編集者という立場で地域情報誌、ビジネス誌、広告を作っていました。たまたま縁があって 3 年前から離島に特化しており、そういう視点から屋久島を見ています。私は島ではなく山奥生まれですが、屋久島とはつながりがあって、交流都市である大分県日田市という水と森が多いところの出身です。

屋久島を弊社の読者の視点で客観的に見ると、知っている人が多いです。有人離島が 420 もあるので、名前が知られていない島がいっぱいあります。例えばすぐ近くにある奄美群島では、10 年前に元ちとせさんという歌手がデビューするまでは、自分の出身地を奄美と言っても分からないから鹿児島と言っていました。そういうことは屋久島でも大分前にあったと思いますが、最近離島経済新聞でも屋久島という離島は入っていますかと最初に名前が挙がるぐらい、いろいろな人が知っている島だと感じています。そういう中で、屋久島が日本で最初に世界自然遺産になり、最近では小笠原諸島が世界自然遺産になりましたが、今後は奄美大島、徳之島、西表島、沖縄の山原が次に世界遺産になるのではないかと言われているので、そういうところを牽引する意味で、先ほどおっしゃっていたフロントランナーとしていろいろと動いてもらいたいと思います。

あとは、私たちは観光情報というよりは島で暮らしている人に注目しているので、実際に屋久島に行っても山に登るより里の人たちとお話をすることが多いです。そうしていると、あれだけの自然の中で育っている人のおもしろさを改めて感じているので、そういうところも伝えていきたいと思います。

以上です。

土屋：ありがとうございました。次に、寺崎さん、お願いします。

寺崎：皆さん、こんにちは。公益財団法人日本交通公社の寺崎と申します。前段階の打ち合わせで、中川さんから宮之浦のすばらしい写真をたくさん見せてやるからと言われて、それを間近で見ることができて非常に楽しかったです。

自分自身は富山県出身ということで、僕の部屋の窓を開けると北アルプスが見えましたし、僕の名前は竜雄ですが、父親から竜雄の雄は雄山の雄だと言われて、雄山がどの山を指すかご存じの方は相当山好きの方だと思いますが、そういう環境で高校時代まで育ちました。今は財団法人日本交通公社に勤務しており、私よりも先輩の方が何人もいらっしゃるので、どういう会社かご存じかと思いますが、若い方は JTB という名前のほうがぴんとくるかもしれません。日本最大手の旅行会社のグループの財団法人に属しているので、今日の僕の発言は観光屋としての立場からの発言になると思

います。

地域資源や豊かな自然を大切にしようという意識の持ち主が集まるところに来ると、どうしても観光の負の側面ばかり指摘されていつも怖い思いをしているので、今日も肩身が狭く、小さな声で話そうとは思いますが、そのうち大暴れするかもしれません。会社の話をすると、われわれの財団は 100 年前にできましたが、日本人の観光旅行者を案内して儲けるという部分が大きくなったので、50 年前に営業部門である JTB を切り離したことをきっかけに、日本の方によりよい旅行をしてもらう、あるいは地域においては観光客を呼び入れることによってよりよいまちづくりをするための調査研究を専門的にする機関になりました。私はそこに所属して二十数年たちます。

1993 年か 1994 年の冬に、僕より 2〜3 年上のとある青年がふらっと事務所を訪ねてきたのが自分と屋久島との最初のかかわりです。どういうことかというと、屋久島でエコツアーを商品化したので、東京まで出てきて屋久島、エコツアーをキーワードに JTB の営業所をいろいろ回りましたが、屋久島ってどこ、エコツアーって何だ、初めて聞いたということで、そういう訳の分からないものは、財団に行けば何となく分かっている頭でっかちがいるかもしれないということで尋ねてこられて、時間を割いていろいろなお話をしたことから、僕の中にこの 2 つのキーワードが刷り込まれました。1995 年に我々のファンドでエコツーリズム研究会を設置し、当時の町長、屋久杉自然館の館長、自然保護協会の皆さんと一緒にエコツーリズムの研究を始めて、それらについて自分の興味がより増してきました。

そういう縁があって、屋久島には何度も行ったことがあります。2000 年を過ぎたころ、環境文化研修センターの主催でエコガイド養成講座が何年か続けられたときに、講師として呼んでいただきました。ただ、このときはきつくて、空港に着くとパジェロが迎えに来ていて、そのまま研修所に行って 2 泊か 3 泊して、ご丁寧に空港に送っていただいて、屋久島に行きながら一歩も外に出ないで過ごしたというのが数年続きました。ですから、屋久島をあまり歩いたことはありませんでしたが、その後機会があっておととしに呼んでいただいたときには、念願だった縄文杉ルートを雪の中行くことができましたし、先月末には 1 週間ぐらい屋久島の山の中を存分に歩くことができました。

それまで、僕にとって屋久島はすごくとっつきにくいというか、小笠原は山が明るいので島に着いたときから心が躍りますが、屋久島は山の色が濃くて山の畏怖、厳しさを感じたことがあります。また、僕は年間 130〜150 日間あちこちの現場に出ているので、旅慣れていると思われるかもしれませんが、誰かに案内してもらうのが一番楽だと思っている口からすると、島の中を回るのはなかなかしんどくてすごく旅行しにくいです。そういうこともあって、若干ネガティブなとらえ方をしていましたが、今回滞在していろいろなところを見て回ると、すごいところだと分かってきました。それとともに、レンタカーがすごく増えて、20 年たって普通の観光地になったという印

象があります。そういう意味では、観光屋の目線で言うと、今は大きな曲がり角に来ているのではないかという感じがするので、後ほど時間をいただければこれらも含めていろいろコメントしたいと思います。ありがとうございます。

土屋：ありがとうございました。話し出すと言いたいことがどんどん増えてしまうと思います。神谷さん、どうぞ。

神谷：山と渓谷社という登山専門出版社の神谷と申します。今は Yamakei Online という登山の情報サイトを運営していますが、山ガールブームのピークである 2009 年から 2011 年には月間『山と渓谷』という登山雑誌の編集長をしていました。山と渓谷社に入って 20 年ですが、10 年ぐらいは『山と渓谷』、あとの 10 年は自然、特に僕が好きな生き物、森の図鑑や単行本を作っていました。

私は、屋久島には遺産認定前の 80 年代後半に何度かお邪魔して、山に登ったりサルを見に行ったりしています。先ほど土屋先生がカミングアウトされましたが、私も正直申し上げて、今は人が多そうで嫌だという印象があります。われわれは『屋久島ブック』というムックも出版してビジネスをしていますが、個人としては人が多そうで行きたくないし、2～3 回行ったからほかに行きたい山もあるという感じで、10 年以上屋久島にはお邪魔していません。

ただ、そうは言いつつも島という独特の環境、場所には非常に大きな期待を持っていて、われわれのような都会に住んでいる人間からすると、町長、いっそ独立してくださいと思います。それは島に対する幻想だと思いますし、経済的なことなど日本の山にいろいろ問題はありますが、少なくとも屋久島で解決できない課題はどこでも解決できないのではないかと思います。島丸ごとが世界遺産で、よくも悪くもブランドの島になっている屋久島で山、自然、地元の生活が守られないようであれば、どこの日本の山でも守られません。屋久島で何とかかなえてもらって、それをわれわれが学ぶという流れになるように、トップランナーとして期待するところはすごく大きいです。

以上です。

土屋：ありがとうございました。私から神谷さんまで 4 人の方は全て外部者として登壇していますが、ここからは内部の方です。まず、荒木さんお願いします。

荒木：皆さん、こんにちは。私は、2011 年 11 月 11 日と 1 が 6 つ並ぶ 100 年に一遍の日に 2 代目の町長に就任した荒木耕治です。どうぞよろしくお願いします。本日は、シンポジウムにお招きいただき、ありがとうございます。まずお礼を申し上げたいと思います。

私ども屋久島は、平成 25 年に日本初の世界自然遺産に登録されてから 20 年という記念すべき年を迎えようとしています。皆さんが今おっしゃったように、世界自然遺産に登録後たくさんの観光客においでいただきました。平成 19 年度には入込客数が 40 万人を超え、観光関連産業は飛躍的に発展し、地域経済に大きな効果をもたらしました。一方、縄文杉を中心とする山岳部への一極集中が進み、貴重な自然環境に負荷がかかり過ぎているという指摘を受けています。屋久島のために、自然環境の保全と利活用という相反する 2 つのテーマをいかに融合させるか今問われているのだろうと思います。このようなことから、屋久島は今山岳部における生態系の変化や利用状況のあり方、し尿処理、ごみ処理など生活環境対策や自然遺産地域にふさわしい施設整備のあり方など、屋久島の環境、観光政策に関するこれまでの歩みをきちんと検証して、関係機関などいろいろな方と協議、議論する中から、これから進むべき一定の方向を導いていきたいと思います。

これまで地元自治体として取り組んだ環境保全対策として、岳参りをするために 24 集落どこからでも山岳部へ行けるように登山道がたくさんあるので、島民が 400 年前から岳参りをしながら自然石を使って作った石積みの龍神杉歩道も含めて、縄文杉への一極集中から登山者の分散化を図っています。また、質の高い認定ガイド制度を確立して、環境保全のためのルールを正しくレクチャーしてもらうような工夫にも取り組もうとしています。また、山岳部の避難小屋からし尿、ごみを搬出するのに多額な費用がかかっておりますし、古来屋久島に住む人たちが信仰し、岳参りしている神々の住む山にし尿があるのも問題なので、今携帯トイレの普及を試行しています。これをさらに進めて、将来的には自分のものは自分で持って帰るシステムを作れないかと考えています。

それから、先ほど中川正二郎君が宮之浦の岳参りの報告をしましたが、私も今年の 6 月 2 日、3 日にかけて 1 泊 2 日で永田岳に私、息子、孫の 3 代で詣でました。日帰りはできないので山小屋に泊まることも経験ですし、屋久島の為政者として自分の目で見て、体験してこれから行くべき道をきちんと決めるべきだという思いや、屋久島町の安寧と発展、世界自然遺産登録 20 周年の記念事業の成功を祈願し、荒れている永田歩道や、花山原生林というすばらしい森をどうしても見ておきたいという思いもあり、私は宮之浦育ちなので宮之浦に参るのが古来からの姿ですが、永田岳に行きました。今日本で一番アカウミガメが産卵する永田のいなか浜で砂を取り、米と塩を準備して登り、永田歩道、花山歩道の原生林を見ながら下ってきました。

そのとき私がどんなことを感じたかお話しさせてください。梅雨のころ雨の中を登り、2 日目の早朝に永田岳に詣でました。残念ながらご来光を見ることはかないませんでしたが、もやの中に見え隠れするたくさんの花をつけて群生するヤクシマシャクナゲの美しさには心を奪われました。古来より山岳信仰が盛んなこの島の人々は、山に対して畏敬の念を持って生きてきました。先人たちが苦労して運んだであろう祠に祈

りを捧げると、自然と厳かな気持ちになります。見渡す限り岩とシャクナゲとヤクザサの世界に身を置いてみると、自然のスケールの大きさにただ感動するばかりでした。私は岳参りを通じ、屋久島の山、森、自然は世界に誇れるすばらしい財産であると改めて実感するとともに、花山のすばらしい屋久杉原生林の巨木の森や、屋久島のいたるところにある杉など、今ある自然をきちんと保護、保全し、後世に残すことが我々の責任だという思いをますます強くしました。

土屋先生から、地元に住む者の視点からの屋久島ということでしたが、私が地元の屋久島高校を卒業して上京し、出身地はと言われて屋久島と答えると、みんな屋久島のことは知らなくて、それは北にあるの、南にあるの、どこにあるのと言われるので、自分の故郷を言うのは非常に恥ずかしいという思いをしました。しかし、今の学生に聞くと、自信を持って屋久島と言い、ぜひ行ってみたいと言われるそうです。そのぐらい屋久島は知名度が高くなりました。それゆえ私の責任も重大だと感じています。今屋久島には、たくさんのファンがそれぞれの価値観を持って訪れてくれます。屋久島が自然遺産に登録される前に作った屋久島憲章には、いつでもどこでもおいしい水が飲めるなど幾つか文言がありますが、それを自分の政治の指針として肝に銘じて今までの 20 年もきちんと検証し、さらにこれから 20 年をどうしていくか関係者と話をし、自然だけが豊かになるのではなくて、そこに暮らす 1 万 4,000 人の生活も豊かになるような屋久島を目指して頑張っていきたいと思います。今後ともどうかよろしくお願いします。長くなりました。

土屋：ありがとうございました。町長としてこれから屋久島をどうしていくか、ご自分の経験を踏まえながらお話しいただきました。

それでは、もう一人の地元代表の中川さん、お願いします。

中川：私は神様のことで来ましたが、先ほどから岳参りと神様の話ばかりで、屋久島があまり神懸かりになるのもいかがかと思います。というのは、それを感じて屋久島に来て、山の中に観音様や山ほど束にした写経など変なものを置いていく人もいて、ほとほと困っております。われわれも加藤君もそれを担いで下ろしました。あがめていただくのはありがたいですが、そういうのはぜひやめていただきたいと思います。

今日、旧暦の 9 月 16 日は屋久島では山の神の日といい、山に入ってはいけない日です。旧の正月、5 月、9 月の 16 日の大潮の日には山仕事をしないというのが昔からの慣わしです。その日は山姫が下りてきて、山姫に会うと命を取られるといいますから、今でも林業の方は山に入りません。山岳捜索の仲間に山仕事をしているメンバーが何人もいますが、たまたまその日が山の神の日だったので、みんな入りたくないと言いました。でも、行方不明になっているので行かないわけにいかないということで、みんなお祓いをしてから入りました。今日はそういう日で、いまだにそれを信じている

人がたくさんいますが、現実にはたくさんの人が屋久島の山に登っています。地元の人の中には、これはちゃんと守るべきだ、昔から入らないのに何で入っているのだと主張する人もたくさんいます。私も同感です。

いろいろありますが、私の代わりに町長にたくさん話していただいたので、以上です。

土屋：ご協力ありがとうございました。それでは、外とも中とも言いにくくて立場は微妙ですが、柴崎さん、お願いします。

柴崎：簡潔に 2 つお話ししたいと思います。まず 1 つ目は、おまえは一体何者だということですが、今でも私は心の中では経済学者だと思っています。では、何で歴史民俗博物館にいるのかと言われるかもしれませんが、もともとは地域経済活性化の研究をするために、林政学のほかに林業経済学を専攻していました。地域に入っていろいろ学んでいるうちに、モデルを組んで分析するやり方だけでは歴史的な流れを追えないし、地域差を酌み取れないと思っているうちに、研究の手法が純粋な経済学からだんだん社会学、民俗学に移ってきて、結果的に今国立歴史民俗博物館の研究部に所属していますが、歴史、文化も尊重しながら、地域を持続的に活性化させたいと根底では考えています。今日は少し経済的な分析もしたのは、もともと経済学者だからです。

2 点目は、私の奥さんは屋久島出身で、博士論文を取得する当時は食べられませんでしたから、奥さんに食べさせてもらいながら屋久島でデータを集めていたという経緯があるので、私にとって屋久島は半分地元で半分そうではありません。とはいっても、実際に暮らしたのは 7～8 カ月ですが、外から見た屋久島と中で生活しながら見た屋久島は随分違うという印象を持ちました。実際に暮らしてみると、当時は世界遺産だとは全く意識しませんでしたが、冬の時期にツワブキを採って家族で食べたりした里の暮らしが非常におもしろかったです。

でも、世界遺産という枠組みが人々の生活にだんだん影響を与えています。具体的には、山に自由に行こうと思っても荒川登山口に関してはシャトルバス制度が導入されていますし、岳参りの際にも警察署に許可をもらって一般の地元の車が山に上がっていくのが掟です。そういうものに非常に違和感を感じています。あと、歴史民俗博物館に行く前には岩手大学で教員をしていたので、白神山地に入ることがありました。白神山地も、世界遺産に登録されたことによってよかった面もありますが、地元のマタギ集団の利用が排除されているという現状もあります。保護地域に指定されたことが果たしてよかったのか悪かったのか考えつつ、できれば地元の人の視点に少しでも寄り添いながら、いい案を出せたらという立場で今は研究しています。

土屋：ありがとうございました。以上、今日のパネルディスカッションに参加いただく方

の自己紹介と、屋久島に期待することについていろいろご意見をいただきました。今回のシンポジウムでは、先ほどの 3 つのご報告でも事実の紹介と同時に問題点、課題を指摘していただきましたし、自己紹介でも既に問題点や見方の違いがたくさん出ています。初めに言っておきますが、これから 45 分ぐらいしかありませんので、何か結論が得られるとは皆さん期待しないでください。むしろ、上のほうと下のほうを含めた全体の 2 つに分けて、いろいろな面をなるべく見せていく中で、問題点を深めていくことに終始するのではないかと思います。

それでは、初めに山岳部の問題です。山岳部といっても、一番上の標高の高いところから比較的低い縄文杉やその下のところまで含んでいるので、一概には言えないという指摘もありますが、ひとまずここが山岳部ということにしたいと思います。山岳部の利用の問題については、加藤さんや柴崎さんの報告でもいろいろ指摘がありましたし、中川さんのご報告もそれとは全く違った意味で非常に関係がありました。この点について、何人かの方にご意見をいただきたいと思います。初めに地元の立場から、中川さん、いかがですか。

中川：私の場合は、安全面というか遭難関係が気になるところで、奥岳方面には素人が単独で入山するのは禁止したほうがいいと前から言っています。ガイドを付けるか何人かで行くかしないと、今後もおそらく遭難が起きると思います。環境省がここ数年頑張っていろいろな施策をしてくれたおかげで、ここ 2 年ぐらいは道迷いが起きていませんので安心していますが、本来は聖域で恐ろしいところです。よその人は自然が豊かできれいですばらしいと言いますが、地元の人にとっては怖いところで、敬うという畏れの心を持ってあまり近寄らなかったところです。そこに登山の経験も少ない人があまりにも軽々しく行ってしまって、そのままいなくなってしまいます。登山経験が豊富な方も、状況が一変すると道を誤ります。本当に難しいところなので、あまり軽々に入るのはいかがかと私は思います。

また、マナー面に関しては、法律に訴えるよりも心に訴えるほうが早いと思います。そういう意味でも、山の神様を信じて、畏敬の念を持ってもらうことで、おのずとマナーがよくなると考えます。昔縄文杉に触れたころは結構傷つけられたりもしました。記念に皮をはいで持って帰ろうなんていう不心得者がいるわけです。でも、あれは神様で、いたずらしたら大変なことになると思ったら、恐れ多くて触れなくなります。触ってもいいでしょうが、傷つけたりはしなくなります。それ以外にも、山に入るときにそういう気持ちがあると、おのずと自分を律してごみを捨てなくなったりします。

私が岳参りをするようになってから特に変わったのは、山に登って万歳という気分にはならなくなりました。山に登らせていただいて本当にありがとうございますという気分です。山を制覇した、山の神様を制覇したというのは全く言語道断で、とんでもない話です。ですから、登らせていただいてありがとうございますといって塩を供えて、無事に帰れますようにとお祈りして帰ります。祠のない山に行ったときも一緒

で、そういう雰囲気のところがたくさんあるので、必ずそれをして帰ります。でないと、帰りに恐ろしい目に遭うかもしれません。（拍手）

雑誌の編集者の方も来ていますが、時々ちゃらい山岳雑誌があります。そういうのを見ると、正直あまりいい気分ではありません。山の上でちゃらいことをしてもらったら、山の神様はどういう気分だろうと思います。ですから、もう少しそこを皆さんに知ってもらって、もっと敬虔な気持ちで登っていただけたらと思います。山岳利用はそういう心構えが重要ではないかと思います。

土屋：どうもありがとうございました。今のはある意味で挑戦されているような感じですが、山と渓谷社はちゃらい記事はあまり書いていないと思います。そういうことに限らず、神谷さん、いかがですか。

神谷：月刊『山と渓谷』と『屋久島ブック』があるのであれですが、中川さんの発言は本当に厳しいですね。今日の最初のお話でおもしろいと思ったのは、加藤さんは登山者、中川さんは登山客と言ったことですが、山と渓谷社ではこの 2 つを分けていて、エコツアー、ツアー登山、あるいはリーダーがいてどこかに連れていってもらう人を登山客、自分で調べて自分で歩けて、完結できないことはありますが自己責任を意識した人を登山者と言っています。

そういう登る側の意識と、場所の問題で、最初に土屋さんが縄文杉と宮之浦も山岳部に混ぜると言いましたが、縄文杉までは観光客が行くところなので月刊『山と渓谷』的には範疇外で、そこから上は登山者なので、もちろんオーバーユースもあると思いますが、レベル、啓発、お金の問題で線引きは本来あってしかるべきだと思います。しかし、その切り分けが成功したところがあるとは思えません。つまり、ここまでは観光客のエリアで、ここから先は登山者のエリアというのは昔からグレーゾーンです。今年話題になっている富士山が典型で、観光客も登山者もいますが、領域的には登山です。われわれ日本人はグレーなトーンで山をとらえているので、線引きは理想としては分かりますが、かなり厳しいだろうと思います。

そうすると、先ほど会場から宿泊地の方が学生に啓発すればいいではないかという意見がありましたが、システムとしては期待するところがあります。人と人の関係の中で、中川さんに会ったらそう思ってしまうでしょうし、宿の人にそう言われれば考えるところはあるでしょう。シカ、登山道など課題は明確で、そういう言葉を山と渓谷社は登山者には伝えられますが、観光客に伝えるのは JTB や宿泊地かもしれないので、外も中も含めて取り巻くプレーヤー1 人 1 人が屋久島や山のことを思い、伝えていけるようになることが重要だと思います。

土屋：ありがとうございました。今登山者、登山客、観光客という言葉が出ましたが、違

う立場から、ご自身はいろいろな山に登られていて、観光客、登山客をメーンのターゲットにお仕事をしている寺崎さん、いかがですか。

寺崎：客観的なデータを分析してお伝えできればいいのでしょうが、かなり主観で 2 つのことをお話ししたいと思います。先ほど先月末に 5 日間屋久島にいたとお話ししましたが、その 3 日間の日中は割と自分で自由に使えるということで、調査と称していろいろなところを見てみました。行かなければいけない理由があったので、1 日は日帰りで淀川から宮之浦を登って下りてきました。

残りの 2 日は、地元の方と相談しながら予定を組みましたが、白谷雲水峡はどうですかと言われたわけです。僕にとって白谷雲水峡は、1990 年代のあるときに行ってすごくパワーをもらいましたが、その後正直白谷雲水峡は一体どうなったのだという感想を持ったので、今回は行きませんでした。もう一つ、縄文杉も仕事で登って、トイレなどいろいろな課題や、雪の中でもデッキにこれだけ人がいて写真を撮るのは大変で、夏は推して知るべしというのを見たので、ルートとしては歩かなくていいやと思いました。逆に、今屋久杉はいいというので行きたかったのですが、結局西部と川を見ました。川はすごく力があっていいと思いましたが、観光客が僕のように、せっかく屋久島に来たのだから私も静かなところがいい、白谷雲水峡ではなくてあっちへ連れていってくれといって、案内する人はたくさんいるわけですから、みんながいろいろなところに連れていったらどうなるでしょうか。利用者のニーズ、レベルに合わせた整備のあり方、利用のルール、案内の仕方を島全体でどう区分けして作り上げていくかもちろん考えてはいるでしょうが、その重要性を今回改めて感じました。

もう一つは、先ほどレンタカーがすごく増えて驚いたと言いましたが、屋久杉自然館の前で車を止めて、登り口までシャトルバスで移動するというシステムはすごくよくできていると思います。そういうことをインターネットで配信すると、おそらくあのルートはガイドなしでも広まっていくと思いますし、この前島に行ったときにはガイドが少なくなってきているように感じましたが、それでいいのでしょうか。ガイドの連中はこの間さんざん好き勝手やりやがって、ざまあみろという人もいるかもしれませんが、島の中で観光産業を支えてきた方々ですから、島の経済という側面にも目を向けるべきだと思います。山のことを考えるにおいては、もちろん自然科学者などが中心になるわけですが、資源の状態、利用者の満足、意識の問題、観光を中心とした経済の問題と、岳参りの中でもよく出てくる地域の方々が観光現象に対してどう考えているのか、自分はその決定にどう関与していきたいのかという 4 つの視点から客観的、科学的にデータを分析して、平場で今後の内容を考えていくことが山岳部の利用でも大いに重要なのではないかと考えています。

土屋：寺崎さん、今の 4 つの視点をもう一度お願いします。

寺崎：1 つ目は自然資源、人文資源の状態に関することです。2 つ目は利用者の目線で、観光客が満足して、続けて来てもらわなければいけませんし、せっかくいい自然の中に人を入れるのですから、それなりの効果があるべきです。3 つ目は観光産業を中心とした社会経済、地域経済への波及という視点です。もう一つは住民の目線、観光に関するコミュニティーの意思です。

土屋：ありがとうございました。初めに 3 人の方にお話を伺いましたが、ほかのパネリストの方で物を言いたいという方はいらっしゃいませんか。どうぞ。

柴崎：私は視点が違うかもしれませんが、世界遺産の島屋久島が観光利用だけでいいのかというのが非常に気になっています。確かに山の利用の話も重要ですが、私が初めて屋久島に入った 15 年前は、もちろん観光業は伸びてきていたものの、建設業や農家など 1 次産業で十分食っていける状態の方とお話をすることができ、その人たちは別に観光に頼らなくてもこの島は大丈夫だという話をされていたわけです。

ところが、公共事業の縮小に伴って建設業者の経営はだんだん厳しくなり、農業も 1980 年代はスナップエンドウの栽培が非常に盛んでしたが厳しくなり、漁業も高齢化が進んで生産額が落ち込む中で、観光にシフトするという動きがあったことを忘れてはいけないと思います。みんなが観光を自発的にやりたいのか、それしか手段がなくなって移動しているのか考えなければいけません。世界遺産の利用を観光だけに特化するのは民間でもできますが、公的な機関の立場からはさまざまな選択肢を出すべきですし、観光以外の価値づけもしていいと思います。具体的には、1 次産品を地産地消するだけではなく、ブランド化して都市の付加価値の高い場所で売ってみる。

もう一つ、歴史、文化をもう一回見直していき、その結果として地元の人や子供たちが文化的な資源に関心を持ち、さらに観光客が来るという仕掛け作りも必要なのではないでしょうか。なぜかというと、観光業に特化するということは、それが失敗したときに非常に危険なダメージを食らいます。そういう事例が残念ながら鹿児島県内にあります。例えば沖縄に一番近い与論島では、1980 年の最果てブームで観光業が非常に盛んになり、入込客が 15 万人でしたが、今は 6 万人に下がっているのではないかと思います。屋久島がそうならないという確かに非常に価値があるから大丈夫だという意見はあると思いますが、状況は分かりません。国立公園も、昭和の初めころは日本新八景ということで誘致活動が非常にいっぱい行われ、9 割に認知されているといっても利用者は減っていて、世界遺産ブームがいつまで続くか分からないと思います。

土屋：山岳部の利用について考えていたわけですが、今 2 つ目の話題にかなり関係するご発言があったので、そちらに移りたいと思います。今の柴崎さんのご意見は、遺産というブランドは山岳部の利用だけ、もしくは観光業だけではなくほかにも使いようが

あり、例えば第 1 次産業の振興もあり得るのではないかというものでした。つまり、教科書的に言えば、島全体として世界遺産的なものを使った地域振興と、もともとの財産である環境の保全という 2 つをどう調和させるかということになると思います。これはすごく難しい問題ですが、鯨本さん、何かご意見はありますか。

鯨本：世界自然遺産というタイトルが付いていますが、世界自然遺産は山の部分で、島を部分では考えられないと思います。そうすると、島とは一体何かということになりますが、自然と人は同じだと私は考えていて、人も含めて自然のあり方を考えていく必要があると思います。島はそれだけで世界なわけです。一つの国という言い方もありますが、島の先は世界です。だから、自分たちだけでこの島を守っていると考えている方はどこの島でもすごく多いです。その島の中には人、動物、植物、山、川、海があって、行事などがあります。島の人たちは島に対して愛着、誇り、感謝を持っています。その塊が島です。そこに対して外の人たちが、世界的に価値があるといって世界自然遺産というタイトルを付けているのだと思います。そして、外の人たちが大量にやってきて、いろいろなことが変わってきます。

私は、今月の初めに屋久島に行って、うろうろしながらすごいところを探していましたが、岳参り、信仰など精神性の高さはすばらしいと思います。『生命の島』という雑誌は知っていますか。こちらは、昭和 61 年に創刊され、平成 21 年に終刊していますが、世界自然遺産認定のずっと前に原生林伐採反対運動にかかわった方々が作り始めたもので、屋久島ではまだ買えるところがあるようです。つまり、伐採によって島の自然がもともと持っていたバランスが変わろうとするときに、島にいる人たちが自治意識の下、こういうものを作ったわけです。山の部分だけではなく、島自体を回している人の精神性の高さも含めて屋久島はすごいところだと思います。

今は、世界自然遺産のインパクトでいろいろな方がやってきたことにより、島が新しいバランスに変わろうとしているので、これから先の未来のバランスを考えていかなければいけないところだと思います。バランスを考えるときは軸が絶対に必要なので、もともと島にある精神性、信仰、人の気持ち、自然のポテンシャルを軸にして、ただ、人が生きていくには 1 次、2 次産業といった産業が必要ですから、そのバランスを屋久島の人と外の人が一緒に考えていければいいのではないかと思います。

土屋：ありがとうございました。非常に答えにくい振り方で申し訳ありませんが、荒木さん、今いろいろな立場から意見が出て、特に直近のお二人からは、観光だけではなく精神性などほかの部分の見直しが重要ではないかというご意見がありました。こういうご意見に対して、一部は先ほどお答えになったような気もしますが、荒木さん個人、町長のどちらとしてでも結構なので、何かコメント、ご意見はありますか。

荒木：ここにいる中川君のお父さんは、福岡から来て屋久島で生活されました。私は、屋久島で生まれ育って、屋久島の土に還っていきます。そして、先ほど鯨本さんが『生命の島』を出されました。屋久島は今いろいろな方が移住してきて、人口 1 万 3,500 人の 1 割は移住者ですが、いろいろな価値観を持った方がいるので、もととも屋久島にいる人たちと入ってきた人の間で温度差があるのが現実です。昭和 40 年代に屋久杉の保全か伐採かで揺れに揺れて、木を切って生活しているお父さんの子供と、守ろうと旗を振っている父親の子供がどんな思いで同じクラスにいたのかということもありました。

そして、私の子供時代、平成の世に世界自然遺産になる前の昭和の時代は、あの小さな島に上屋久町、屋久町という 2 つの町がありました。これが最大の問題で、昭和の合併のときに屋久島は 1 つになっておくべきだったと私は思います。先ほど中川君が南のほうに捜索に出たことがないと言いました。また、今の観光パンフレットの屋久島は丸いですが、昭和の時代の観光パンフレットは、私の出身の旧上屋久町であれば屋久町の部分が白紙でした。それだけ両町が引き合うのは為政者としては当然のことです。また、縄文杉に行くときにも、世界自然遺産になった平成 5 年にはまだ合併していませんから、旧屋久町の安房の荒川登山口から登りますが、縄文杉のある場所は旧上屋久町です。そうすると、旧上屋久町にしてみたら、お客さんは何で隣の町から登って、隣の町に泊まるのかということになります。また、国や県が 1 つのものを作ろうとしても、一方がイエスと言っても一方がノーと言ったらできないので、屋久島環境文化村センター、屋久島環境文化研修センターの 2 つ作ることになります。屋久島にはそういう過去があります。

何が言いたいかというと、合併して 6 年目ですが、本当の島づくりができる環境が今整ったと私は思っています。また、8 割は国有地なので、幾ら島の人たちがああしろ、こうしろと言ったってできるわけがないという現実もあります。ですから、私は世界自然遺産登録 20 周年を契機に、皆さんが言われたことを十分理解して、もう一遍立ち止まって自分たちの島のことを自分たちの目線、身の丈できちんと考えなければいけないと思います。島で暮らす 1 万 4,000 人の意識の改革が非常に問題です。今観光産業が伸びてきて、5～6 割の人がそれに携わっているかもしれませんが、1 次産業をないがしろにするつもりは全くありません。むしろ、限界集落にならず生き延びていくには、山岳部に集中する登山客を里に下ろして、そこに住んでいる人たちが自分たちの集落に誇りを持って里のエコツアーをして、各集落で地域のそれぞれに特色を持った 24 集落の歴史や文化にも触れてもらうことが、島全体の活性化につながるのではないかと思います。

私は今どこへ行っても屋久島に対するいろいろ意見を聞きますが、聞くだけ聞いて自分で考えて、自分の思いをこの 1 年ぐらいの間にきちんと出したいものですから、今日もいろいろな人の屋久島を外から見た目もありましたし、自分たちが進むべき道

が何なのかという意見を聞けて、非常にいい時間だったと思います。

土屋：中川さんご自身も観光にかかわっておられるわけですが、観光産業そのものに限界があるかもしれないし、今町長やそのほかの方から移住者の方も含めた議論が必要だという意見が出ていましたが、今の状況やこれから先の 1 次産業も含めたあり方について、町民としていかがですか。

中川：島の将来は町長に語っていただきたいのですが、観光客は明らかに減っていて、5 年前が 40 万人で、おそらく去年、今年は 30 万人を切っているので、この 5 年間で一気に 25%、10 万人ぐらい減りました。ピークのころには車も宿も足りなくて、野宿している人がいっぱいいたような状態だったので、慌てていろいろな受け入れ準備をしましたが、できたころには人が減ってしまって、今はむしろ過剰というかちょっと余っている状況です。商売をやっている側としては、屋久島の経済を成り立たせるには観光客は今の人数より多くていいと思いますが、シーズンに集中してしまうと大変なので、もう少し分散されればいいと思います。あと、屋久島はこのままでいてください、自然を残してくださいとよく言われますが、われわれだって文化的生活はしたいわけですから、昔の生活をしなさいと言われているみたいでちょっとなと思うときが時々あるということは理解していただきたいです。

あとは何でしたっけ。

土屋：外部の方と一緒に議論する場が必要かどうかという話です。

中川：親父たちが 50 年前に来て屋久島に墓がありますし、僕は 5 歳からずっとこっちですから地元の人間だと思っていますが、外部から血というかいろいろな考えが入ってこないと、地元の発想だけでは先には進みません。地元の人間は結構保守的なので、新しいものを入れないとだめです。よその人はいろいろな考えを持っていて、中にはついていけないような話もありますが、外の意見も重要だと僕は思います。

土屋：ありがとうございました。これから新しい話を振ると時間を取ってしまうので、今の流れの中で議論していないことがあれば、まだ一回しか発言していない方が多いですが、どなたか一言ありませんか。神谷さん。

神谷：時間がかかると思います。今日環境省のヒガシオカさんがいらしていますが、昔、富士山はオーバーユースなので、ふもとにあるいい自然へ誘導するキャンペーンをするので協力してくれないかとお越しになったことがあります。それは無理で、みんな日本一の富士山に登りたいから例えば私どもの『富士山ブック』を買い、槍ヶ岳に登

りたいから槍ヶ岳に行くのであって、槍ヶ岳の代わりに小さい槍ヶ岳を用意したといっても登らないわけです。よくも悪くも大衆や登山者の感情がそこに向かっている以上、しょうがないと受け入れるしかないと思います。

ただ、ちょっとでもいろいろな魅力を発信することで、つまり、10 ページの屋久島特集のうち 2 ページは岳参りや滝のことを載せるよう配慮することで、ゆっくりイメージが広がっていくし、その魅力でリピーターになったときの利用の分散化や、新しいイメージができると思います。不思議なことに、富士山が世界遺産になって、登山の本の業界ではそれまで特集しても無理だと言っていた 1 合目から 5 合目までの登山道が人気です。上は観光客が行くので登山者は下を歩こうというツアーで、多くはないですが結構人が行っています。何かのきっかけで価値観、興味が広がることはあるので、われわれも含めていろいろな魅力を発信してすくい上げていく努力さえすれば、おのずと解決される部分もあるのではないかと思います。

土屋：ありがとうございました。寺崎さん、どうですか。観光も含めた地域全体の振興、もしくは山岳部の利用についてご発言いただければと思います。

寺崎：山岳部のことも含めて観光の仕事をしていると、すごく当たり前の話ですが、どんどん流通が強くなってきます。これは観光の世界だけではないと思いますが、そういうところときちんと話をしていくためにも、島にかかわっている方々が自分たちの島の観光やそれ以外のことも含めてどうしていくかという基本的な考え方を共有しないと、先ほど言ったような外圧ではないですが、さらに無秩序に展開していく可能性がすごく強いと思うので、ぜひ国内での先例となるような取り組みをお願いします。僕は小笠原にも随分かかわっていますが、いろいろな面で屋久島を参考にしています。島の観光を考えることが、島だけではなく日本国内で大きな役割を担っているというプライドを持っていただけると、僕の仕事からすると非常にうれしいと思います。

土屋：ありがとうございました。鯨本さんは、下のほうのことを中心にお話をされたと思いますが、山岳部のことについては何かご意見はないですか。

鯨本：山にはあまり登らないので何とも言えませんが、編集長をしている方、ツアーを作っている方がいて、私は今情報流通というところを常に考えていますが、全体的な話で欠けていた部分を見つけたので、言っておかなければと思います。これだけ神聖な屋久島の山に登って制覇した人が出てくるのであれば、情報の作り方を考え、屋久島が世の中でどういう言い方で人に伝わっているかチェックしなければいけないと思います。東京には有人離島が 11 島ありますが、その中で 300 人しかいない御蔵島というところがあります。全離島に取材に行きましたが、取材シートを出せと言われたのは

そこの島だけでした。言葉の出し方を間違えると間違ったお客さんが来るので、そこはどういう言葉で出すのかチェックしています。そういう意味で、これから世界自然遺産になるような、人がたくさん来るだろう、話題になるだろうというところに関しては、情報デザインをどうしていくか考えたほうがいいということは、全然違う視点ですが補足したいと思います。

土屋：ありがとうございました。神谷さんは少し触れていましたが、今日はその辺にあまり触れませんでした。まだ一回しか発言していないのは柴崎さんだけですが、最後に何かまだ言い足りないことがあれば。

柴崎：なぜ先ほど山のところであの話をしたのかずっと考えていましたが、観光だけではない島の魅力を提供することで、入山規制という形ではなく、多くの人が山に行かなくても里に滞在して楽しめて、結果的として山も、より静かな雰囲気、空間になると思って発言をしたというのが自分なりの解釈です。

あと、もし 1 分だけで議論するということであれば、屋久島高校の生徒といろいろ話をして、ワークショップをしたり、アンケート調査を一緒に取ったりしましたが、1 つだけ気になる点がありました。町長や中川さんの世代は、山や川で遊んだ自分たちの身近な暮らしの中での屋久島というイメージが根底にあると思いますが、今の屋久島の子供たちに話を聞くと、生活に根差していないというか、地元なのに、世界遺産に登録されたから大事なのだという外から与えられた情報をそのまま発信している状況が怖いと僕は思っています。どうしたらいいか考えてみると、おじいちゃんと昔どういうところで遊んだかというワークショップをしたり、ヤマモモを食べてみたり、ツワブキを一緒に採ってみたりしていたけれどもどういう暮らしをしていたのかという原体験をしておいたほうが、中からより島人らしい屋久島のあり方を提言できるという意味では、産業も大事ですが、長い目で見たときには、地域作りには教育が欠かせないと思いました。

以上です。

土屋：ありがとうございました。本来はここでまとめをしなければいけませんが、よくある逃げの手で、私の司会能力のなさで事務当局からこれ以上は絶対超えないでください言われた時間を過ぎているので、時間にかこつけてあまりまとめをしないで終わることになってしまいます。

そうはいっても、最後に少しまとめると、今日は基調報告を含めていろいろな視点でお話をいただきましたが、屋久島の持つ多様さが非常に出ていたと思います。今は山岳部の縄文杉を中心とした観光利用だけに集中してしまっていますが、実際に屋久島が持つ魅力、もともとのあり方はかなり多様なものがあって、観光資源という面以

外に、いろいろな産業や、岳参りのように一番上のほうから海にまで至るさまざまな文化があって、さらには、先ほど町長のお話にあったように、約 1 割の方が移住者である多様な社会になっているという魅力があるわけです。皆さんが強調されていたように、そういう多様性をもう一度みんなで共有し、理解し合って、話し合いをしながら方向性を決めていくべきで、おそらく今が決めるときなのではないかというのは大体皆さん一致していると思います。その中では、少し生煮えに終わりましたが、山岳部でのゾーニングもこれからおそらく具体的なものとして見えてこないといけないのではないかと思います。

非常に雑駁なまとめ方で申し訳ありませんが、時間が尽きましたのでこれでおしまいにします。もう一度講演者、パネリストの方々に拍手をお願いします。どうもありがとうございました。(拍手)

パネルディスカッションはここで終わりですが、この面々に先ほどからお会いしていると、しゃべりたい、少し発言させてくれという方がおそらくたくさんいらっしゃるのではないかと思います。全員にお話を聞いているとおそらく徹夜になってしまいますが、今日の議論に関係することでもいいですし、抜けていた部分、もしくは強調したい部分でも構わないので、発言されたい方はいらっしゃいませんか。挙手をして、肩書をお願いします。どうぞ。

質問者:関東屋久島会会長のイワカワと申します。町長がおっしゃった町村合併を契機に、24 ある集落のうち 10 の集落を統合して組織した会の 3 代目の会長です。

「ふるさとは遠くにありて」ではなくて、時々帰省して確認しようと私は呼びかけておりますが、どうも地元とこっちへ来ている人たちには温度差があります。観光客の減少に対して非常に危機感を持っており、荒木町長の応援団のつもりでイベント実行委員会を立ち上げて、昨日も国連大学でワークショップをしました。若い大学生の皆さんに呼びかけて、ぜひ屋久島へ来てもらいたいといろいろな PR 活動をしている中で、地域振興ということをぜひ考えていただきたいと思います。そのために、今後は生物多様性と、最近脚光を浴びている水力発電と発送電分離のモデル地域として唯一 60 年の歴史がありますので、エコツーリズムをテーマにして、広く海外へ向けたグローバルな戦略展開をお願いできないかと考えております。

具体的なお願いとして、運賃が高いので、アクセス、交通手段の改善ということで羽田から直行便を飛ばしたい。町長の構想の中にもあろうかと思いますが、地元からもそういう要請が出ておりますので、ぜひ考えていただきたい。それから、鹿児島－屋久島間の運賃が高いので、JAL、JTB に働きかけていただきたい。それから、トッピーは独占企業で運賃が高くなるので、この辺の行政指導もあろうかと思います。

もう一点は、大分前に町を挙げて森林鉄道の復活に取り組んでいましたが、当時の運輸省の基準にどうしても合致しませんでした。あれが屋久島の一つのシンボルだと

思っているので、最近はやりの特区でもう一度復元して遺産の維持、継承も含めてぜひ手がけられないか。併せて、先ほど言った水力発電と電気自動車の普及、車の入込規制、将来は水素電池の活用というところまで、屋久島の世界的なモデルとしてのレベルアップを図ってほしいと思います。町長にたくさん課題を押し付けるようなことになるかもしれませんが、先生方のご指導と、今日は世界に冠たる環境省と林野庁のコラボレーションで、しかも国立公園で 8 割は国有林ですから、ぜひ管理主体としての行政のバックアップもお願いします。長くなりましたが発言を終わります。これからもどうぞよろしくお願いします。

土屋：ありがとうございました。回答となると時間がかかると思うので、今のはご意見ということでよろしいですか。

質問者：懇親会でまた。

土屋：では、もう一人短く。

質問者：日本山岳会のコンドウと申します。屋久島は世界自然遺産というのが今日の前提となっていますが、ちょっと前に入込数が多くなって、オーバーユースや糞尿の問題が出てきたときに、屋久島が世界自然遺産から外されるのではないかと思ったこともありました。その辺は皆さん結構バランスを取っていろいろ考えているので、大丈夫とも思いますが、これからやり方を間違えると将来的にガラパゴスが陥ったように危機遺産になって、世界自然遺産が取り消されてしまうこともあるかと思います。短い返答で結構ですが、その辺について皆さんどう考えているか聞きたいと思います。

土屋：町長ですかね。

荒木：縄文杉に集中していて、今おっしゃったような声が聞こえてきたので、利用調整して人数を制限しようという動きもありましたが、地元の反対があって今はほかの方法でやろうとしています。ですから、今言われたようなことがないように、きちんと共生できるような島づくりをしていきたいと思います。取り消されることはないと思います、

質問者：分かりました。ありがとうございます。

土屋：もう少し議論を続けたいところですが、そろそろお時間にしたほうがよさそうなので、ここでパネルディスカッションと質疑応答は終わりにして、司会にマイクを戻したい

と思います。どうもありがとうございました。（拍手）

司会：土屋先生、ありがとうございました。本日は、屋久島の内外の方々に報告、パネルディスカッションをいただきました。私どもにおきましても、屋久島の世界遺産登録20周年ということで、世界遺産登録地域が社会や自然環境に与えた影響や今後の屋久島のあるべき姿について、お集まりの皆様と一緒に改めて考える機会とすることができたように思います。なお、このシンポジウムの成果は、来る11月23日に屋久島で行われる記念シンポジウムに還元したいと思います。

本日は、ご報告、ご討議いただいた皆様方におかれましては、大変貴重なお話を本当にありがとうございました。いま一度盛大な拍手をお願いいたします。（拍手）

それでは、閉会に当たり、共催である屋久島世界自然遺産登録20周年記念事業実行委員、鹿児島県自然保護課のノリヒサ課長より、閉会のご挨拶を頂戴いたします。

則久：今ご紹介いただいた、鹿児島県自然保護課長の則久と申します。今日の会議は環境省九州地方環境事務所に主催していただきました。本当にありがとうございました。共催は私ども鹿児島県と屋久島町、屋久島環境文化財団の3者で組織する世界遺産登録20周年記念事業実行委員会で、町長が実行委員長ですが、壇上におりますので代わりにご挨拶させていただきます。

ご承知のように、12月11日で屋久島の世界自然遺産登録から20年になるわけですが、今日このメンバーで議論していただいて大変よかったと思います。十分お分かりかと思いますが、地域の文化、歴史に根差した管理をもう一回見つめ直すことが必要ではないかと訴えたかったのです。ご存じの方がどれだけいらっしゃるかあれですが、20年前に鹿児島県、屋久島町、地域の方々が一緒になって、屋久島環境文化村構想を作りました。これは、岳参りに象徴される自然とともに暮らしてきた屋久島の方々の生活文化の中に、当時のバブルがはじけたころの日本の近代産業文明が失った大切なものがあり、これが今後の社会を作るモデルになるのではないかということで、環境文化と名付けて、それに根差した地域作りをしていこうと考えたものです。その後、世界遺産になって想定外のブレークをして、お客さんが縄文杉に一極集中したわけですが、そういうところで抱えている問題を今後どうしていくのかもう一回考えるという意味で、地域の伝統、文化に根差して問い直していくべきではないかというのがわれわれ行政側の問題認識です。

屋久島には大きく利用の問題とシカの問題がありますが、シカの問題は文化だけではないので、今回は利用の問題について岳参り、林業など自然と人がかかわってきたことに根差してもう一回問い直していければということで企画しました。暴露しますと、もともと屋久島町と県でぜひ東京でもやりたいと言っていましたが、県の財政当局からばっさりと予算を切られて、会場は押さえましたがお金がない、どうしようと

思っていたら、環境省に快くお金を出していただき、無事開催することができました。どうもありがとうございます。この場で議論していただいて大変よかったと思います。司会の方からもありましたが、11 月 23 日には屋久島で、町民の方にも集まっていただいてお祭り的な要素も入れながら記念式典をやり、その場で今日の結果をご報告しますので、ご都合のいい方はぜひ屋久島にも来ていただければと思います。

お願いばかりになりますが、最後に、入り口に屋久島の山岳部環境保全募金の募金箱を置いておりますので、皆様お帰りの際に少し入れていただければと思います。募金の場合ネックがあり、募金箱を持って帰りますので、登山口では 1 人 500 円ということでお願いしていますが、500 円がいっぱいたまると重くて大変です。紙のお金でも結構ですので、ご協力いただければと思います。今日は、長い時間本当にありがとうございました。（拍手）

司会：以上をもちまして、「屋久島世界遺産登録 20 周年記念シンポジウム in 東京　世界自然遺産・屋久島の未来」を閉会とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。